

十三、文樂座の危機——「説經讚語」一埒

寛政度に、高津新地において今日の文樂座が發祥しましたことは、既に述べた通りです。この文樂の芝居が、博勞町の稻荷の境内にあつたときに、文樂に一大危機の來襲があつた。それは、「説經讚語事件」といふのです。時は天保の八年丁酉五月の下旬の事です。三井寺宮持分、蟬丸宮配下に「説經讚語座」といふ一座を組立てまして、大阪天王寺領御藏跡大黒屋正兵衛仕願人となつて三井寺の役人などが出張に及んで、大阪における凡ての「宮芝居」は、説經の配下に屬すべきものであるといふことは、もう既に願濟みの事であるといふのです。寢耳に水の話であるが、宮芝居が「悉く」この意に従つて無條件に「説經讚語」の配下となりました。すると「説經讚語」では、蟬丸宮への寄附として宮芝居から運上取上興行をせよとの申出である。畢竟するにこれが三井寺の奥の手であつた。これがその「説經讚語」の目的であつたのです。この主旨を以て行くと稻荷の境内にある——宮芝居の一つであつた文樂の人形芝居は、明かに説經讚語の配下に屬し、その支配を受けねばならぬことになりました。

この時に、文樂芝居の太夫を初め三味線彈の一連が、勃然として奮起したのです。私どもの藝道は、「左様の配下に成つて業道致不申」(四代目長門太夫の日記による、以下同様)と斷乎として反對の態度

を執つた。そして説經讚語の配下とならねばならぬならば、その藝とその稼業とを捨て、しまはうといふのが、文樂芝居の幕内の意氣です。——今日の文樂座の幕内の無力と比較して、私は既に藝道院遅の天保度だが、文樂藝人の意氣を旺なりとして、今の文樂座の人々に、この話を特に聴かして樂にさした。い。——そして事實文樂芝居では、天保八年九月初日の「鎌倉三代記」、「桂川連理柵」、「義經腰越狀」を限りに木戸を閉めてしまつたのです。その時の名代は榊屋五兵衛、櫓下の太夫は豊竹喜代太夫、主なる太夫は長門太夫、重太夫、住太夫、勢見太夫といふ顔ぶれ、三味線の筆頭が豊澤仙左衛門です。

九月限りで休んでゐるのですから、文樂表方及び人形方は、太夫が働いてくれねばならぬといふく、嘆願に及んだのですが、太夫三味線は、説經讚語の配下を脱せねば、餓死するとも再び舞臺へは出ないといふ決心が固かつたのです。困つたのは文樂軒です。とうとう公事沙汰となつて、東の役所へ持出したが、三井寺の申分が立つて、文樂は「三井寺の配下に相成候様」との負公事であつた。色を失つたのは文樂芝居の人々であつたが、太夫と三味線との臍は決つてゐる、餓死を覺悟してゐるといふのですからその結末は固い。これでは餘りに殘念だといふので、太夫連中は背水の陣を布いて再び今度は「西御役所に願出候處」西役所では、内山彦次郎といふ白面の秩父の重忠がゐた。そして西役所には幸ひに記録にあるとの事で、内山彦次郎といふ白面の判決によると、

「説經と申物は十五歳迄の子供に狂言を致させ右説經節を語るを説經讚語といふ尙又太夫と申ものは中々左様成るものに不有義太夫淨るりは操りに掛けて語る事先例にて既に官職迄被下候事各々知る所成れば其下に可付ものに不有との御さとし」

といふのである。これで文樂芝居は宮芝居であつても、説經座の配下に屬するものでないといふ事になつた。

九月限りで文樂が閉場してゐるから、稻荷の北の芝居——文樂は稻荷の東の芝居であつた——を説經讚語座と名乗つて、名代は永川宮内、紋下太夫は竹本筆太夫で、即ち文樂座以外の太夫三味線、人形を驅集めて、天保八年十月十七日には「奥州安達原」、十二月二日には、「刈萱」で打つてゐたのが内山彦次郎の判決で、文樂芝居が勝公事となつたから、天保八年十二月二日から、元の稻荷芝居で、

元 越前掾 名代 樹屋五兵衛
 太夫元 豊竹木々太夫
 祖 太夫 竹本重太夫

といふ事で、前狂言に「伽羅先代萩」次「國性爺合戦」切「三十石燈始」で、目出度再開場をしました。

この勝公事としての興行を「東京音楽學校の編纂の邦樂年表」では十一月七月初日の由になつてゐますが、公事その他の都合で、番附面は十一月七月初日とあるが、實際は十二月二日の初日である。一つに

は説經讀語座の北門の芝居が十二月二日初日と聞いて、公事の勝つた勢で、これ見よがしに同日の初日に繰下げて、壓倒的に説經讀語座に打ツつかつたものらしい。

一方目出度く芝居興行が成つたといふのと、長々休ましたといふ意味で、床連中から表方手代茶屋に施行が行はれた。この施行に預つたものゝ人名が、この長門太夫の日記に擧げてある。無用の些事のやうですが、當時の小規模の劇場の内部と組織の一端とが察せられますから、こゝに轉載しておく。

大勘定 幸三郎

西奥場 丈助、平七

東奥場 元七、長三郎、新兵衛

表方 十四人

辨當 三人

茶店 こと、かめ、ひさ、彌七、勘兵衛

大工 千吉、佐兵衛、外二人

床山 一人

樂家 一人

都合三十四人に白米五升を切手で渡す。——十二月三日

金貳歩づゝ渡したのは

竹本重太夫、竹本住太夫、竹本長門太夫

金三朱と二百八十六文づゝ渡したのは

竹本勢見太夫、竹本三根太夫、豊竹岡太夫、豊澤仙左衛門、鶴澤勝右衛門

といふのであります。で、今一つ傳ふべきはこの判決を下して後、係りの内山彦次郎は言葉を繼いで、

「文樂一座は銘々家業を休みても太夫は説經の下に付べきものに不有とて云分を立てしは藝道にかたきもの神妙也又筆太夫事は仲間の老分と聞何の辨へなく説經座の頭となり扱々慙を知らぬ者とて御笑ひ被成候よし」

とある。——何としても、内山彦次郎は對決の細川勝元の風手があつて、事件が事件だけに面白いではありませんか。この記録の終りに

古老衆一座共同じ心配成共我身命を投打て太夫の申分相立候は長門太夫一人の規模に候間後世に書止置者也

とある。長門太夫(三代)の決心と、その勞苦がこの一句に盡きてゐるやうに思はれて、この記録の長門

太夫(四代)の筆になることを忘れるほど、眞實の浸み出る一句であると私は涙ぐましいまでに思つたのです。

これで「人形淨るり」の概論は終つたと思ひますが、終りに臨んで、私の一言添へたいことは、何時の時代でも、その時代の藝には満足が出来ない。満足が出来ないで、求めようとする處に藝の進歩があるのです。が、藝に油斷は大の禁物です。その一例として、今日誰れでも「淨るり」といふ言葉から、すぐ聯想される「太十」、即ち尼ヶ崎の段を十冊目に持つてゐる「繪本太功記」が初めて上演された時の逸事を述べておきませう。それは寛政十一年七月十二日初日の事で、四百五十年の人形淨るりの歴史からいふと、寛政は斯道の衰退期ですが、太夫としては錚々たる人がある。籠太夫ふもとといふ、時太夫などがそれである。今日の比ではありませんが、この「繪本太功記」の新作上演に當つての口上がかうです。座は道頓堀の若太夫の芝居で座元は豊竹諏訪太夫、紋下は豊竹麓太夫。座元豊竹諏訪太夫の口上

……近來操芝居衰微仕自然と相續相成がたくいか斗嘆ヶ敷奉存候得共未熟の者故可致様も無之候所去御仕打方へ段々御頼申入候て中興以來之仕方を相のぞき棧敷代場せん共至つて下直に仕則新淨るり太功記之内本能寺合戦より山崎大合戦迄日數十三日之間一日の趣向に取組奉御覽入候尤も豊竹越前芝居

再興且つ元祖追福のため毎朝五ツ時迄二百人様宛ほうらくに仕候間初日出候はゞ御最眞あつて賑々敷御光駕の程偏奉希上候以上

淨るり 豊竹麓太夫、豊竹時太夫、豊竹巴太夫、豊竹兵太夫、豊竹美代太夫、豊竹磯太夫、豊竹矢

太夫、豊竹内匠太夫

三味線 竹澤彌七、鶴澤清七、竹澤友二、鶴澤文吾、鶴澤傳吾、鶴澤三二

人形 豊松松十郎、吉田千四、吉田三吾、豊松定藏、豊松十三郎、吉田虎藏、吉田多三、吉田新吾

作者 近松やなぎ、湖水軒、千葉軒、頭取吉田辰五郎

一きり札せん、十文

一日見

上棧敷一軒代銀十二匁、下棧敷一軒代銀十一匁

出 一軒代六百文、向棧敷一軒二百五十文

割合 一人前代百二十四文、一きり場錢六文

右の通に直段の外一切よけい取不申候已上

とあります。今日から見て、これだけの太夫、三味線、人形があつて、「相續相成がたく」とこぼしてゐる

ます。そしてこの時の書卸した「太功記」が今日のあの大物の十段目なのです。そして毎朝五ツ迄に入場の先着順で二百名の「法樂」を宣傳してゐるぢやありませんか。「法樂」とは木戸錢無料の意味です。そして棧敷場代の値下げを強調してゐます。

今一つ最後に申上げたいことは、文化十一年——この寛政十一年の麓太夫の「太功記」から十五年後に書綴られた「竹子集」といふ淨るり皮肉論三卷がありまして、その内に左の記事があります。

……故人の法を亂し、本家よりやりたいまゝに語りくすすより、芝居衰微し、よき太夫も出來ず、年老ひし人々は、當時の語り振を聞いては唾咄し、さみし厭うて故人を慕ひつゝ、今二十三十そこの人々はたゞ淨るりは、今のやうに語るものぞと思ひ、益々藝も拙く、藝に成實の面白き所に至らず、近代の操芝居やゝもすれば、色をうしなひ、そこよこよとかけ廻り、或は旅に、或は京登り、其上消えたり燈つたり、軒を並べし樽芝居にて先づ出來がたく、是皆藝の未熟から、太夫はなんぞやかぶきの世ぢや、淨るりの末などと、我身の下手は知りもせで、色々の述懐、どれが西やら東やら、竹本豊竹ではなうて野化本奇余呂竹にて、千くら太夫手くら太夫といへり。是等の輩の語り振り聞くに、生れ付たるうは聲にて、呼聲直ほ上らず、聽衆その情おこらす、無下に聲をついやすのみ、引くまじき所をひき、まわすまじき所を廻し、童ンべの笛をふくにひとしく、或は氣張聲にて、ゑづくご

としもあり、又調べ文句、音曲の辨へ知らず、かぶき役者の聲色振もあり、是等の類ひ皆人々之を學び、日を過ぎ月を重ね、覆輪にかけ、亂れくゝて末世に至つては、乞食淨るりと成果てし事は非もなしとやいはん、かなしきとやいはん、何卒千々くら手くらの淺ましき風義にまどひ云々。(文化十一年孟春、竹子集上卷)

と、今日の文樂座の有様を、文化の昔に豫言してゐるやうだ。この「竹子集」のこの一節を見て、尻羞痒しりこさばい太夫が、今日多くはありますまいか。これは最後のお慰みです。これで人形淨るりの概論の筆を擱きますが、「頭の分類」「人形の遣ひ方」は更に別項にやゝ意を盡して書きました。只「説經讚語座」の一件は、人形芝居の上に重大なる意味のある歴史の因縁があるのですが、これは筆を改めて私の「近世人形淨るり史」に詳説する事としました。が、かういふ事件のあつたといふ事だけをこゝに觸れておく事にしました。(昭和三年八月——同四年八月)